

土左日記略注（一）

〈凡例〉

- 一、青谿書屋本『土左日記』（萩谷朴編 新典社刊『影印本 土左日記（新訂版）』による）の本文から、問題とする箇所を含む文を引用し、私見を述べる。
- 二、掲出本文は原文の表記を尊重し、仮名表記を漢字表記に改めることはしなかったが、句読点、濁点を付し、おどろ字は起こした。
- 三、注の中で本文を引用する場合には、読解の便を考慮し、仮名表記を漢字表記に改めるなどの処置を施した。
- 四、萩谷朴『土佐日記全注釈』（昭和四十二年八月 角川書店）を『全注釈』、新編日本古典文学全集『土佐日記 蜻蛉日記』（平成七年十月 小学館 『土佐日記』の校注者は菊池靖彦）を『新編全集』と略称した。
- 五、この日記を執筆したことになっている女性については括弧付きで「作者」と表記し、真の作者紀貫之と区別した。
- 六、この作品はフィクションであるが、某年十二月二十一日の門出から翌年二月十六日の帰京に至る旅程は、作者貫之の実体験に基づいて書かれていると判断した。すなわちこの作品は、承平四年

徳 原 茂 実

（九三四）十二月二十一日に門出、承平五年二月十六日に帰京という事実に基づいており、その間の旅程や地名等もおおむね実際の通りであるという前提のもとに注を施した。

七、私はこれまでに『土左日記』について次の二編の論考を発表している。

「土左日記「船のをさしける翁」について―前国守（船君）像の確定へ―」（『武庫川国文』第七十八号 平成二十六年十一月）

「土左日記を読みなおす」（『日本語日本文学論叢』第十号 平成二十七年三月）

本略注では前者を前稿①、後者を前稿②と呼称する。

〈略注〉

〈発端 十二月二十一日〉

をとこもすなる日記といふものを、をむなもしてみむとてするなり。

（注）この冒頭文に関しては、女性「作者」による執筆宣言とする従来の解釈に問題はないと判断している。ただし私は、「作者」は

貫之によって創造されたキャラクターであり、『土左日記』はこの「作者」を主人公とするフィクションであると考えているので、貫之が女性に自らを「仮託」したという通説には従えない。この点に關しては、前稿②参照。なお、小松英雄は『古典再入門―土左日記』を入りぐちにして（平成十八年十一月 笠間書院）において、この冒頭文についての従来解釈を全面否定しているが、別稿にて同説への批判を試みる予定である。

それのとしのはつかあまりひとひのひの、いぬのときにかどです。

（注）門出の日取と刻限は、陰陽師によって勘申された大切な決まり事であり、厳守されなければならないのであろう。「戌の時に」と、わざわざ刻限が記されているのは、旅立ちをする人たちにとって、門出の刻限までに出発準備をととのえることが終日念頭を離れない重要事であったからかと思われる。なお、『土左日記』はフィクションであるが、「凡例」にも述べた通り、おそらく作者貫之の体験にもとづいて書かれており、この日付と刻限も、貫之一行の門出の日付と刻限にはかならなかったであろう。そうでなかったと考えるべき理由はない。

ところで『蜻蛉日記』上巻には、作者の父藤原倫寧が陸奥守として下向するにあたって、作者との別れに暇取る倫寧に向かって周囲の者が「時たがひぬる」（刻限が過ぎてしまいます）と出発を促す場面がある。また『更級日記』には、作者の父菅原孝標が常陸介として下向する日、「時なりぬれば」（出発の刻限となったので）作者との最後の対面を切り上げて出てゆく姿が描かれている。いずれも、

出発予定の刻限から遅れることが許されなかった当時の風習をうかがわせる事例である。

あるひと、あがたのよとせいつとせはてて、れいのことどもみなしをえて、げゆなどとりて、ふねにのるべきところへわたる。

（注）「例の事どもみなしをえて、解由などとりて」について、女性が国司の事務引継ぎや解由状について知るはずはないと説く向きもある。しかし、知性と好奇心を持ちあわせた女性であれば、このところの国守の多忙の理由について、身近な男性に訊ねることがあったとしても不思議はない。まして「作者」は、「男もすなる日記といふものを、女もしてみむ」と思い立ち、実際『土左日記』を書き上げることになる進取的な女性として造形されているのであるから、この程度のことを知っているのは当然なのである。

「船に乗るべきところ」とは、十二月二十七日条に言う「大津」であろう。作者たち一行はここで、本格的な出立の日と定められた二十七日まで待機することとなる。

〈十二月二十二日〉

廿二日に、いづみのくにまでと、たひらかに願たつ。

（注）「和泉国までと、たひらかに願立つ」については、これを「（何とぞせめて）和泉国まではと、無事平穩であるように、（神仏へ）願をかける」（『全注釈』）、「さしあたり和泉の国まで無事であるように」と願を立てた」（『新編全集』）などと解するのが通例である。

しかし、仮に「たひらかに願立つ」であればのように解することができようが、本文は「たひらかに願立つ」なのであるから、「たひらかに」は「願立つ」にかかる修飾語であるとか考えられない。岩波旧大系に「心静かに、神仏に願を立てる意か」とあるのが考え方としては正しい。前稿①には、船師（一月十七日条にいう「船のをさしける翁」の主宰のもと、乗客乗員一同、心静かに願を立てる、という試解を示しておいた。船師は船の安全運航の最高責任者であり、船の雇主である前国守（船君）とは別人である。

ふぢはらのときざね、ふなぢなれどむまのはなむけす。かみなかしも、ゑひあきて、いとあやしく、しほうみのほとりにて、あざれあへり。

（注）人々の泥酔のさまは、次に取り上げる十二月二十四日条にも見える。集団的な泥酔は宗教行事とかかわりがある。ここでは神事のあとの直会を兼ねた「馬のはなむけ」であつたと考えられる。前稿①参照。なお、「藤原のときざね」については、十二月二十七日条の注において触れる。

〈十二月二十四日〉

廿四日、講師むまのはなむけしにいでませり。

（注）「講師」が国分寺の住職であり、国内の僧尼を司る重要な地位にある僧侶であることは諸注の示す通りであるが、そのような僧侶による「馬のはなむけ」が、単に前国守となごりを惜しむために酒

食を共にする送別の宴であつたとは考え難からう。一行の海路平安を祈る仏事と、その後の精進落としがこの日の「馬のはなむけ」の実態であつたと推測していいのではなからうか。「いでませり」という丁寧な敬語表現は、わざわざ自分たちのために仏事を修しに向いてくれた講師への「作者」の好意と敬意がこめられている。前稿①参照。翌二十五日の新国守の招待を冷淡に叙述するために対蹠的に用いた馬鹿丁寧な言葉遣いという『全注釈』の説は採らない。

ありとあるかみしも、わらはまでゑひしれて、一文字をだにしらぬものしが、あしは十文字にふみてぞあそぶ。

（注）十二月二十一日の神事のあとの泥酔にひき続き、ここでの泥酔もまた宗教行事にともなう集団的泥酔と考えることによって、講師による「うまのはなむけ」が、仏事をメインとするものであつたとする推測が確かなものとならう。前者は神事のあとの直会、後者は仏事のあとの精進落しである。これら神事と仏事は出航に先だつ重要な宗教行事であり、このあと作中には泥酔のさまは描かれな。前稿①参照。

「ものしかあしは」の文字列については、「者、しが足は」と、「し」を代名詞、「が」を連体格の格助詞と解する説もあるが、ここでは「物師が、足は」と解しておく。「物師」は何らかの技能を身につけた者の意で、「船子、梶取」たちをさしていると見ておきたい。橘純一『校註土佐日記』に「目に一丁字無き先生方がといふやうなアイロニカルな語気」とあるのが参考になる。おそらく「講師」と「物師」は音韻的にも意味的にも対をなしていよう。「講師」は内典外

典に通曉した知識人であり、一方、梶取や船子はまさに「目に一丁字無き」人々にほかならない。

〈十二月二十五日〉

廿五日、かみのたちより、よびにふみもてきたなり。

〔注〕「守の館より、呼びに文もて来たなり」について『全注釈』は、「廿四日には、講師がわざわざ大津まで出向いて餞別をしてくれたのに、後輩である公鑒が、貫之を国府まで呼びつける思いやりのなさを詰る形で、「よくまあ、呼びになんか、手紙を持たせて、使者を寄越したものだ」と、かねがね公鑒に対して含むところのある不満な気持をぶちまけたものと考えられる」と解説している（同書八二ページ）。『新編全集』頭注も同様の見解を示している。『全注釈』は一貫して、着任が遅れた新国守島田公鑒に対して貫之が不快感を抱いていたと主張しており、ここで「含むところのある不満な気持」というのもそれなのであるが、国守着任の少々遅れたものではないうえ、貫之自身の土佐国着任もどうであったか知れたものではない以上、着任の遅れをもって貫之の不快感を云々するのは根拠の乏しい推測であろう。まして、女性「作者」が新国守に対して不快感を抱いていると『土左日記』から読み取ることとはできないように思うのである。

新国守が前国守のために正式な送別の宴を催すとなれば、それは五位の位階を持つ官人同士の交際であるから、公館にしきたりに則った宴席をしつらえ、使者に招待状を届けさせるのは当然の礼法ではなからうか。前国守がこれに不快感を抱くはずはないし、まし

て女性「作者」が不快感を抱くはずもない。なお、助動詞「なり」を『全注釈』は、伝聞ではなく断定と解しているが、伝聞と解して何ら問題はない。招待状を受け取ったのは前国守であり、「作者」はそれを読んだわけでもなければ、それが使者によって届けられたところを目撃したわけでもなからう。身近な誰かからその話を伝聞したというのがこの「なり」である。なお、以上に関しては前稿①でも言及した。

よばれていたりて、ひひとひ、よひとよ、とかくあそぶやうにてあけにけり。

〔注〕送別の宴に招待された主賓はもちろん前国守であるが、その他の主立った人々も招かれてお相伴にあずかったのであり、「作者」もその一人だったということなのである。招待された女性たちは、男たちの宴席とは別室で、新国守側の女性たちの接待を受け、歓談することとなる。前国守側の女性たちは、都の最新情報に心ひかれ、新国守側の女性たちは、土佐国の気候や食物などについて知りたく思うであろうから、話題は尽きなかったにちがいない。一方、男たちの宴席では、お定まりの管弦の遊びが行われ、その音色が切れ切れに女たちの部屋にも聞こえてきた。「とかくあそぶやうにて」はそのことを言っている。以上は、前稿①でも触れた。

この日、承平四年（九三四）十二月二十五日は立春にあたる。そのことの意味は十二月二十七日条において述べる。

（十二月二十六日）

からうたは、これにえかず。

（注）通説では「筆者が女で漢詩に疎いことを標榜」（『新編全集』）などとされるが、「これにえ書かず」とは、この仮名日記には漢詩は書くことができないの謂いであって、「作者」が漢詩に疎いのかどうかは、ここからはわからない。むしろ、一月十七日条の「むべも昔の男は」以下の記述などからは、「作者」は漢詩文にも興味を抱く進取的な女性として造形されているようである。

みやこいできみにあはむとこしものをこしかひもなくわかれぬるかな

（注）新国守の歌である。この歌について巧拙の評価を下す注釈は管見に入らない。私は前稿①に「あらためて新国守の歌を読んでみると、惜別の情が明瞭に表現されており、いささか「ただごと歌」めいてはいるが、なかなかの出来栄えといってもいいのではないだろうか。歌詞について言えば、「みやこいで」との莊重な出だしから一転して「こしものをこしかひもなく」と同語反復によって軽快に展開し、「わかれぬるかな」と格調高く結んでいるのも好ましい印象である。この第五句が貫之の著名歌「むすぶ手のしづくににごる山の井のあかでも人にわかれぬるかな」（古今集・離別）の第五句と同じであるのは、離別歌の手本を示そうとする作者貫之の意図のあらわれであるかのようにである。この歌の真の作者は貫之であろう」と述べた。社交の場におけるアマチュア歌人の作としては、

この程度で上出来なのだという貫之の考え方が透けて見える。

しるたへのなみちをとほくゆきかひてわれににべきはたれならなくに

（注）前国守の返歌である。前国守は和歌が不得意な人物として造形されており、この歌も不出来な一首として作られている。前稿①に、次のように述べた。「まず、贈答歌の返歌として、歌語が贈歌のそれに対応していないのは明らかに欠点であるが、それは、晴れの席で披露するために、和歌の苦手な前国守があらかじめ用意した苦心の作という設定ゆえと考えれば、欠点としてあげつらうにも及ぶまい。問題は下句にある。「我に似べきはたれならなくに」とは、新国守が我（前国守）と似た境遇となるはずだと言うのであり、前国守としては、めでたく任期を終えるという意味で詠んだとしても、それは国守としての自らの実績を誇示しているとも受け取られかねないであろう。（中略）前国守と新国守との交流においては、前国守は謙譲の美德を発揮する一方、新国守を讃えるのが礼儀になかったややかたであって、あなたもいずれは私と同じ、という『土左日記』の前国守の歌は、本人の意図がいかなるものであれ、非常識な一首と言わざるをえないのである。（中略）ここに作者貫之による教訓を読み取ることができるとするならば、アマチュアの和歌は新国守のように素直に、わかりやすく詠めばいいのであって、前国守のように考えすぎてひねくり回すと碌なことにはならない、といったところか。」

以上のように、前稿①ではアマチュアの和歌作法といった点を強調したが、本稿でもそれを継承するものである。

『全注釈』は、『土左日記』の諸性格を分析して二四項目の「評語」を立て、その筆頭に「歌論展開」をあげて、次のように説明を加えている。「権門の子弟のために書かれた個人用教科書としての初步的歌論書というこの作品の表層的使命からして、随所に展開されている歌論的叙述は、この作品の第一主題に基づくものであるといわねばならない。作者貫之の歌学者としての含蓄がここに活用されている。」

『全注釈』ではこのように、初心者のための「初步的歌論書」ということが強調されているのであるが、今の新国守と前国守の贈答歌などからは、幼童のための入門書というよりは、アマチュア歌人のための指南書といった一面を読み取ることができるように思う。それは、『古今集』の成立を大きな契機として、宮廷社会に和歌が流行しつつある当時の風潮に投じるものでもあつたらう。

ことひとびとのもありけれど、さかしきもなかるべし。

(注)「さかしきもなかるべし」とは、女性「作者」が和歌について一言をもつ人物として造形されていることを物語っている。それにしても、この文言を「こと人々」が知つたら、さぞかし「作者」のことを生意気な女だと批判するであろうが、この文言は日記にひそかに書き付けられたのであって、「作者」はこの日記を誰にも読ませるつもりはないことになっているのである。それは末尾の「とまれかくまれ、とく破りてむ」に至るまで、一貫している。勿論それはフィクションであつて、作者貫之はこの作品を廃棄しなかった。

とかくいひて、さきのかみ、いまのもの、もろともにおりて、いまのあるじも、さきのも、とりかはして、ゑひごとにこころよげなることとして、いでいりにけり。

(注)「手とり交わして」については、それが中国起源の作法であることが北山円正『土左日記』の「手取り交はして」―神仙譚の受容について―(『神女国文』二三 平成二四年三月)に指摘されている。女性「作者」の辛辣な眼を通して見た、官人同士のもつたいぶつた別れの作法が、軽妙な文体によってカリカチュアライズされている。

〈十二月二十七日〉

廿七日、おほつよりうらどをさしてこぎいづ。

(注)十二月二十一日条に「船に乗るべき所」とあるのが、ここで言う「大津」である。二十一日に国司館から門出をしてから二十七日まで、一行の船は大津に係留されており、この日、ようやく本格的な船旅が始まつたわけである。十二月二十一日条の注において、門出の日取と刻限は陰陽師の勘申に従つて定められたと述べたが、その後の本格的な旅立ちの日取も同様であつたに違いない。それも、門出のあと改めて旅立ちの日取を勘申させたのではなく、門出と旅立ちとをセットにして勘申させたのが現実 に即している。先に、承平四年(九三四)十二月二十五日が立春に当ることを指摘しておいたが、それを前提として、このあたりの日程について考えてみたい。

前国守は土佐から帰京するにあたって、何らかの理由で海路を選んだのであったが、太平洋の荒波が打ち寄せる沿岸伝いを航海するのであるから、冬場の出航は危険と判断したにちがいない。せめて立春を過ぎてから本格的な出航を計画し、陰陽師に諮問したところ、十二月二十一日に門出、立春の二日後の二十七日に大津を出航という日取を答申したのではなかったか。このように予定が組まれ、それを関係者が知るところとなって、二十五、二十六の両日、前国守は出航直前の前国守たちを国守館に招待し、送別の宴を催したのではなかったか。『全注釈』などは、前国守によって国守館に呼びつけられた前国守たちの不快感を強調しているが、むしろ前国守たちにとっては、窮屈な船中での生活から解放された快適な二日間であつたとは考えられないであろうか。

以上の推測に妥当性が認められるならば、前国守の帰京が遅れた理由は、あなたがち新国守の赴任の後れにばかり帰せられるものではなく、前国守が春の訪れを待つて出航するために土佐滞在を延ばしたことも、大きな理由としてあげられよう。また、立春を過ぎての出航とはいっても、春まだ浅いころの天候不順は、外洋の航海にとって危険が多く、停泊地で日数を費やすことが多くなったのもやむをえない仕儀といえよう。そうなった根本的な理由は、前国守が早期の帰京を犠牲にしてまで船旅を選択したところに帰せられるのではなかろうか。

かくあるうちに、京にてうまれたりしをむなご、くににてにはかにうせにしかば、このごろのいでたちいそぎをみれど、なにごともしはす。京へかへるに、をむなごのなきのみぞかなしびこふる。ある

ひとびともえたへず。このあひだに、あるひとのかきていだせるうた。
みやこへとおもふをものかなしきはかへらぬひとのあればなりけり

またあるときは

あるものとわすれつつなほなきひとをいづらととふぞかなしかりける

(注)「かくあるうちに」とは、前国守の一行が出発準備(「いでたちいそぎ」)にいそしみつつ今に至る期間をさすが、帰京の喜びに沸き立つ人々とは対照的に、女兒を失った一家は、悲しみのためにひっそりと沈み込んでいる(「なにことも言はず」)のである。通説によれば、女兒を亡くしたのは前国守夫妻とされているが、前稿②に述べたように、女兒を亡くしたのは「作者」の家族であり、前国守ではない。まして、紀貫之が土佐国で女兒を亡くしたとする一般常識には何の根拠もない。この問題については、以下この略注において随時述べることとなろう。

この日「大津より浦戸をさして漕ぎ」出した船中の様子について、前稿②にて次のように記述した。「船中の様子を具体的に思い描いてみるならば、前国守(船君)の一家をはじめ、いくつかの家族やグループが、船室のあちこちに陣取っており、「作者」一家が占めた一隅のみ、やけに静かなのである。「あるひとびと」とは、「作者」一家のそばに座を占め、その悲しみを知る人々なのである。二首の歌は家族の誰かの作で、この二首は「作者」とその家族によって共有されたのである。「書きていだせる」という、沈黙の中での歌のやりとりは、この家族の沈み込んだ鬱悶気をよくあらわしている

といえよう。」

なお、「作者」は新国守主催の送別会に招待されるなど、前国守一行の中にあつてグレードの高い位置にあるようで、それは「作者」一家が前国守集団の中にあつて枢要な位置を占めていることのあらわれでもある。一月十一日条では、「作者」が亡き女兒の母に対して「母の悲しがるることは」と敬語を使用していることから考えて、「作者」は亡き女兒の母の妹、あるいは義妹（亡き女兒の父の妹）といった位置付けが与えられているのかもしれない。

二首目の和歌の「あるものと忘れつつ」については、女兒の死という、その母親や「作者」にとつて忘れるはずもない痛切な事実がなぜ「忘れつつ」と表現されるのかについて、適切な説明が従来なされていらないように思う。ここでは『伊勢物語』第八十三段（『古今集』雑歌下にも）の「忘れては夢かと思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとは」の一首が思い起こされなければならないだろう。惟喬親王の出家は、業平（『伊勢物語』では「馬の頭」）にとつて、忘れるべくもない痛切な出来事であつた。かつての親王との交友があまりにも親密で楽しいものであつたために（それは『伊勢物語』八十二段と八十三段前半部に描かれている）、ふと心がうつろになつた瞬間などに、そのなつかしい過去に今身を置いているかのような錯覚に一瞬おちいってしまうのを「忘れては」と表現したのである。この前例があればこそ、ここでの「あるものと忘れつつ」という和歌的表現が成り立ちうるのではないか。女兒生前のなつかしい記憶が常に胸中に去来しているために、ふとした瞬間、そのころに身を置いているかのような錯覚におちいるのであつて、そのような心情を動詞「忘れ」によって表現することは、業平作の前例によって保証

されているという次第なのである。

かみのたちのひとびとのなかに、このきたるひとびとぞ、こころあらうにはいはれほのめく。

（注）鹿兒崎まで追いかけてきた「守の館の人々」の中に新国守がいないことについて『全注釈』は問題視し、貫之が新国守島田公鑒に対して不快感を抱いていたとする持論を展開しているが、その憶測が当たらないことは、十二月二十五日の注に示した通りである。前国守と新国守との別れの儀式は、礼法に則つてすでに終わっているものであり、ここからは気の合った者同士気楽な交歓の場面なのである。

ふなやかたのちりもちり、そらくくももただよひぬとぞいふなる。

（注）「船屋形の塵もちり、空ゆく雲も漂ひぬ」という言葉が漢籍に由来する表現であることは、諸注が指摘する通りである。「作者」がこの言葉に耳を止め、日記に書きとめたことになっているのは、彼女を漢詩文に心を寄せる進取的な女性として造形するためでもある。

ふちはらのときざね、たちばなのすゑひら、ことひとびとおひきたり。

（注）この一文について小松英雄は論文「藤原のときざね、船路なれど馬のはなむけす―書き手の心境を読み取るキーワード―」（『武

蔵野文学』六一 平成二五年(二月)の中で「義理で見送りに来た人たちが浜辺に着いたときには、船が動いていたのであわてて追っかけてきた、ということであろう」と述べている。しかしこの兩名は一月九日の条で「この人々ぞころざしある人々なりける。この人々の深きころざしは、この海にもおとらざるべし」と絶賛されている人たちであり、「義理で見送りに来た人たち」という小松の主張は当たらない。小松は同論文において、十二月二十二日条の藤原ときざね主催の「馬のはなむけ」について、「彼は、危険な航路が心配でたまらない書き手の心情など思いやる気持ちもなく、ただ、形式的に送別の宴を催したにすぎない。それが、「藤原のときざね、船路なれど馬のはなむけす」という表現なのである」とか、「『土左日記』には、実在の人物としてフルネームで登場しているが、モデルがいたとしても、食わせ者の象徴としてデフォルメされているのであろう」などと、「ときざね」に対する「書き手」の不快感を強調しているが、いずれも誤解である。「ときざね」に寄せる「作者」の好感は、右に引いた一月九日条の記述によって明らかである。

〈十二月二十九日〉

おほみなとにとまれり。くすし、ふりはへて、とうそ、白散、さけくはへてもてきたり。ころざしあるにいたり。

(注)「ころざしあるに似たり」という表現について『全注釈』は、「はなはだ穏やかならざる申し条である。どう見ても、貫之がこの医師に対して好意を有していたとは考えられない」と述べている。本稿においてはこの文中の「貫之」を「作者」と読み替えなければなら

ないのであるが、いずれにしても、この表現に何らかのこだわりを感じられるのは確かであろう。『全注釈』はそれを女兒の死と関連づけて、次のように述べている。「発病して間もなく、何日も看護する余裕もなく、死の手に幼児を奪われた。秋口の食中毒や疫病に多い急激な容態の変化を思わしめる。恐らく、その時、医師が手遅れをしたか、処置を誤ったか。あるいは、不可抗力であったとしても、患者の家族は、医師を怨みがちなものである(中略)貫之には、その社交儀礼的な贈りものまでが空空しく感ぜられて、素直にその好意をうけとることができなかったであろう。」

「秋口の食中毒」とは憶測が過ぎるように思われるし、食中毒なら親の責任だろうとつこみを入れたくもなるが、医師に対する遺族の不満のあらわれというのは確かに一説ではあろう。本稿では「作者」が女性であることに留意し、別の一説を立ててみたい。

医師が持参したのは「屠蘇、白散、酒加へて」であった。「屠蘇も白散ともに酒に浸して飲む元旦用の薬酒」(岩波旧大系頭注)であるから、元旦を前にしての医師の贈り物としては最もふさわしいものといえよう。そのことは「作者」にもわかつてはいたはずだが、女性としてはいま一つ物足りなかった(ということになっている)のではないか。翌元旦の記事の中に「いもじ、あらめも、はがためもなし」とある。せっかく正月用品を贈ってくれるのなら、これら芋蓼、荒布、菌固め(大根、瓜、串刺、押鮎、焼鳥等という)などの中の一品でも添えてくれたなら、元旦の食卓が少しはにぎわうのと思うのが女性らしい感じ方であると、男性作者貫之は考えて、「ころざしあるにいたり」という含みのある表現を女性「作者」になさしめたのではなかったか。

私は前稿②において次のように述べた。「(旅中における)貫之の心労は並大抵のものではなかったであろうが、帰京後、落ち着きを取り戻した貫之が旅での経験を振り返った時、一団の中の、自分とは立場を異にする人々は、あの旅をどのように経験したのかについて、想いを致すことがあったのではないか。貫之と全く立場を異にする人物、それは女性にはかならない。多少なりとも航海の安全に責任をもち、力をつくすこともできる男性たちとは異なり、神仏の加護と男たちの活動にすべてを委ねる一方で、安全運航の責任を一切免除されている女性こそが、貫之とは大きく異なった心情と視点とをもって旅を経験したはずである。一女性を「作者」とする仮名日記を貫之が構想するに至った理由も、このあたりにあったのではないか。」

『土左日記』には随所に、女性ならではの(と作者貫之が考える)感覚や思考が埋め込まれているように思われる。「作者」が酒に關して冷淡である一方、ご馳走には目がないようなのもそれであろう。この「屠蘇、白散、酒」の贈り物については、「一応感謝はしているものの、正月食品が添えられていない氣の利かなさには、「ころざしあるに似たり」と遠回しに不満をもらす一方、前日、十二月二十八日に「山口のちみね」が「酒、よきものども」を持参した時には、酒だけではなくご馳走も添えられていたからか、「ゆくゆく飲み食ふ」と、ご満悦の様子である。十二月二十二日と二十四日条における、男たちの酔態を描くにあたっての「潮海のとりにてあざれあへり」とか「一文字をだに知らぬものしが、足は十文字にふみてぞ遊ぶ」とかの表現は、従来、女性らしくない諧謔表現と評される向きがあったが、むしろ貫之としては、男たちの醜態を皮肉な

目で観察する、若く聡明な女性の辛辣さを意図したものであったかもしれないのである。(以下別稿)

(とくはら・しげみ 本学教授)